子どもたちの笑顔

青野　有里子

今回、私は初めてスタディーツアーに参加し、リーダーを務めました。前回のスタディーツアーでは、プランはなく、出会った子どもたちに絵本を渡していたと聞いていました。そこで、今回孤児院などの子どもたちに絵本を渡す場所を決め、スタディーツアーのプランを立てました。

私が、実際にカンボジアに行き本当によかったと感じたのは、絵本を通し、子どもたちの笑顔を見られたことです。私たちが作った絵本をカンボジアの子どもたちが一生懸命に読んで笑っている、これは実際にカンボジアに行き、直接子どもたちに絵本を渡さないと見て、感じることのできないことだと思います。初めて絵本の読み聞かせにも挑戦し、子どもたちの前で通訳の方と一緒に読み聞かせをしました。その時の子どもたちのきらきら輝く目がとても印象的で、私は子どもたちの様子を見てとても嬉しくなりました。絵本だけをカンボジアへ送ることもできますが、カンボジアに行き子どもたちに直接渡す意味を実際に今回感じることができました。

また、今後の課題も見えてきました。今回のスタディーツアーで一番問題だと感じたクメール語訳です。日本ではなくカンボジアに着いてから、自分たちの作った絵本のクメール語訳が間違っているということがわかったのです。日本でやるべき作業をカンボジアでやらなくてはいけなく、自分たちの準備不足、確認不足に気づきました。「カンボジアの子どもたちが読み書きの練習ができるように絵本を作ったのに、そのクメール語が間違っているなんて…」と思うとともに、「あのまま子どもたちに渡していたら、私たちは、カンボジアの子どもたちに間違った知識を与えてしまっていたのだ」と自分を責めました。本当に責任のあることですし、私たちの活動は、一人一人責任感を持って進めていくべきだと感じました。今回のクメール語訳の問題は、本当に多くの人の協力、ご好意で乗り越えることができました。一人一人に感謝したいと思います。私たちにとっても、苦しい経験でしたが、この問題があったからこそ、私たちは多くのことを学ぶことができたのではないかと思います。

私は、４回生の先輩に誘われ、１回生の秋に一員になり、リーダーになりました。最初は、単純に絵本が好きということで興味を持ち、活動を続けていくうちに私たち日本人が当たり前に読むことができる絵本がカンボジアでは不足していることやその背景にあるカンボジアの歴史を知っていきました。今回のスタディーツアーでカンボジアの忘れてはならない歴史やカンボジアの現状を改めて見て感じることができました。私たちができることは、小さなことかもしれない、でも、カンボジアで出会った子どもたちのあの絵本をもらって嬉しそうなあの笑顔のために自分たちのできる活動をこれからも続けて行きたいと強く思いました。私たちがカンボジアで経験したこと、感じたことを他の P.C.C.のメンバー、そして新しく入ってくる新入生に伝え、P.C.C.をより発展させ、大きくしていきたいです。今回のメンバーは、学生４人とクレイグ先生というとても少ない人数でしたが、次回のスタディーツアーではより多くのメンバーに参加してもらい、カンボジアの子どもたちに自分たちが作った絵本をたくさん贈ってほしいと思います。

初めての挑戦ばかりで大変なこともありましたが、得るものがとても多いスタディーツアーでした。今回、ご協力いただいた方々本当にありがとうございました。そして、スタディーツアーのメンバーありがとう！